

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32654

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16497

研究課題名(和文)「身体学」の構築 その原理論の研究と方法論の整備

研究課題名(英文) Construction of "Somatologie". - Study of its principle theory and development of methodology -

研究代表者

武藤 伸司 (Muto, Shinji)

東京女子体育大学・体育学部・講師

研究者番号：90732777

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「身体学」という新たな学問を構築することであった。そのために現象学を基礎理論に据え、スポーツ運動学を応用理論として位置づけた。身体学の原理としては、身体がいかにして身体に「成る(Werden)」のか、という根本的な問題を研究した。またそれと並行して、身体学の方法論を開発、整備することも研究した。これについては例えば、人が様々なスポーツや武道を行うことの中で感じられている身体と運動の感覚を記述として残し、それをデータとして収集するという質的な研究方法を採用することとなった。これらの原理論と方法論の研究によって、身体学の大枠を形成することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to build a new discipline of "Somatologie". For that purpose, I put "Phanomenologie" as a basic theory and positioned "Bewegungslehre des Sports" as applied theory. As a principle of physics, I studied the fundamental problem of how the body "becomes" (Werden). In parallel with that, I also studied developing and maintaining the methodology of Somatologie. In this regard I adopted a qualitative research method. It describes, for example, the feeling of the body and movement that man feel in doing various sports and martial arts, and collects it as data. Through studies of these theory and methodology, I was able to form the framework of Somatologie.

研究分野：身体性哲学

キーワード：現象学 スポーツ運動学 キネステーズ 質的研究 時間意識 借問分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 国外において、身体性に対する現象学的な研究は、フッサールのキネステーズ分析(運動感覚の分析)に始まり、メルロ＝ポンティとラントグレーベによって研究の基礎が築かれ、現在も世界中で研究されている。そして近年、フランスでは哲学的身体論の著作が多数出版されている。また、認知科学との学際的研究も行われている。これらの哲学的な身体性の研究は、2000年代に多くの業績が呈示された。

(2) 国内においても、身体性哲学、感覚の現象学的な分析をはじめ、精神病理学、リハビリテーション、緩和ケア、舞踊、芸術など、様々な領域において身体性の問題は議論されている。これらの身体性に関する国内の研究は、国外の研究と共に、応用的な学際研究として、現在も様々な分野で展開されている。

(3) 以上のような身体性の現象学的研究を用いた応用的研究の一つに、スポーツ運動学がある。ドイツのマイネルに始まるスポーツ運動学は、スポーツの科学的な運動分析とは異なった、運動における主観的な感覚体験である技とその修得がいかにしてなされるのかを研究する、人間学的・現象学的運動学である。日本ではそれを岸野雄三が特に現象学的方法論を重視し、金子明友が発生論的運動学として体系化した。しかしながら、発祥のドイツでは、マイネルの独創である形態学的な視点が重要視されず、科学的な研究が押し進められ、90年代には、現象学との積極的な学際的研究は見られなくなった。他方、日本における運動学研究は、岸野以来、現象学的な分析方法を重要視して、「身体知」というこれまで学問的に問題とされてこなかった領域を、体育教育の現場において積極的に研究している。近年、ドイツでもマイネルの運動学が見直されている機運があるが、しかし現象学との関係は、日本のスポーツ運動学の方が進んでいるというのが現状と思われる。

以上のことから、「身体学」という一つの学問体系の構築を目指す本研究の位置づけは、現象学的な身体性研究とスポーツ運動学研究の延長線上にある。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、身体性哲学ないし哲学的身体論の観点から、身体を巡る一つの「学」の構築を目指す。具体的には、現象学を基礎的な理論に据え、スポーツ運動学を応用的な理論として位置づけ、それらを総合した学問体系を構築することになる。

そのために本研究は、1.「身体性の生成」の原理とその問題系の見取り図を作成し、2.問題探究の方法論を呈示する。これらのことによって、これまで諸科学が客観的に扱ってきた身体的前提を根本から問い直し、体育学

ないし身体に関わる諸科学一般の基盤を提供することが期待できると考える。

そうした研究目的において、身体学は、以下の四つを主要な研究課題とする。

運動と空間構成に関わる「キネステーズと時間意識」の研究とその分析方法の呈示

「ゼロのキネステーズ」による身体性と自我の発生の解明

「間身体性」における感覚の形成と原交通(モナドの共鳴)の解明

以上の原理論を基にした、運動者における実践的な体験記述の方法論の研究

からが原理論研究であり、が方法論研究となる。

(2) 2年の研究期間の中で解明を目指すのは、特に1.の課題であり、現理論研究の基礎を形成することである。具体的には、以下のような内実である。

身体学研究の射程を定めるため、具体的な事例(身体運動の不可逆性、キネステーズという運動遂行時における身体感覚の二重性)から、現象学的な身体構成論を研究する。

具体的事例から身体構成の本質規則性を現象学によって見出し、身体学を本質学として扱うための原理論として明確に規定する。

つまり、身体学研究における問題領域の核心(運動感覚と時間性)を規定することと、それが単に事実の例示ではなく、本質に対する学として成立し得るための原理を呈示する、ということが研究期間内の目標である。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、平成28年度に、現象学と運動学に関連する研究論文と書籍の収集と分析と、各スポーツおよび武道の競技者による体験記述レポートの収集を並行して行う。特に について、本研究は、運動者の運動感覚の体験記述を個別事例として収集した上で、その本質(キネステーズ)を帰納的に導出するという方法を採用。その個別事例は、本学の学生を中心に、授業やゼミなどで集める。また並行して、体験レポートの記述方法や収集方法について、効率のかつ効果的なシステム化を検討する。

平成29年度は、収集した体験記述の整理と分析をした上で本質規則性の呈示を目指し、その分析結果と本質規則性の考察を論文として、諸研究機関で発表する。

(2) 以上のことから、本研究を進める上で遂行すべきことは、現象学と運動学に関する文献の収集と研究と、それと並行して、実際にスポーツや競技を行っている、あるいは行っていた人たちの体験記述レポートを集めることの、二つである。

まず現象学については、代表研究者にとっ

て、この点の研究はすでにライフワークであるが、現象学的な研究の基本テキストであるフッサール全集は次々に刊行されており、そうした文献購読と研究は、新たな見解の発見と、これまでの理論構築の補強のため、継続していく必要がある。そのために、具体的な方策として、本学に現象学の文献を用意することが求められる。

他方、運動学においては、本学に着任すると同時に研究に着手したこともあり、金子をはじめとする基本的で著名な文献は目を通したものの、その他の書籍や論文の収集は、まだまだ足りない。特に必要であるのは、今現在の運動学研究者の新しい論文である。しかしこの点に関しては、本学が体育大学であることから、関連書籍、論文集は多分にある。ただ、外語文献が少ないので、この点は収集と研究の必要がある。

以上のことから、本研究にとって、応募者が運動学研究者の研究手法や記述傾向、運動学理論の基本をよく理解する必要がある。この運動学の理論に関する研究も、現象学研究と同時にを行い、これら二つの領域にまたがる原理論をまとめ上げて、身体学の体系化を目指す。これが本研究の骨となる。

次に、競技者の体験記述レポート収集であるが、これがまさに本研究の肉となる。身体という具体的な事象を扱う以上、事例の収集は不可欠である。スポーツや武道は、それぞれに独特の運動形態を持ち、その形態に即して生じる運動感覚もまた独特である。こうした独特かつ個別的な感覚から、その原理としての本質規則性を見出そうとする場合、同じ競技におけるそれぞれの競技者の複数の体験記述はもちろんのこと、なにより異なる競技間の差異と類似に注目する必要がある。なぜなら、それら差異性と類似性の精査と比較の中で、本質といえる共通項が見出し得るからである（このことは、現象学における本質直観の方法である）。したがって、体育大学である本学は、多種多様な競技経験者、また多様なレベルの競技者を有しているため、本研究にとって非常に良い環境となる。

4. 研究成果

(1)本研究の平成28年度の課題は、主に(1)身体学研究の内実の確定と、(2)収集データの整理と活用(論文作成)、研究の実践における方法の吟味であった。設定されたこれらの課題に対し、平成28年度の成果は以下の通りである。

身体学それ自体の定義と研究領域を確定した。これについては、すでに平成27年度末に、本学の紀要において概要が示されていたが、その概要の細部を補完する理論を提示する必要があった。それは、キネステーズや時間意識の理論をさらに詰めること

である。その点について、発生的現象学の基本理解とその研究方法の原理を示すことは、運動伝承研究会での講演によって形を成した。またこの点について、本学の紀要へ「感情移入」、「脱構築」、「間身体性」を軸に作成した論文を発表した。これにより、身体学の原理論と考えられる多くの理論が提示された。

競技者による体験記述のデータ収集も、概ね順調に進んだ。それらは、記述を中心にして、インタビューの音声、現場における動画など、様々なメディアで収集できた。しかしながら、「収集の方法」は、単に現象を記録に残すだけでなく、目的を持ったデータ収集、あるいは、そうした目的とは意図しないような偶然的なデータ収集など、様々なタイプの現象を混ぜ込んだ方が、より現実に即した分析ができるのでは、という課題が浮き彫りとなった。また、収集したデータの整理や分類の方法も考える必要が生じた。これらの点は、次年度に引き続く課題となった。

(2)平成29年度の研究課題は、昨年度に生じたデータ収集の課題を検討し、改善策を構築していくことであった。そこで、今年度のゼミ生に対するデータ収集は、単に本人の記述に任せるのではなく、対話形式にして記録を行った。この対話による体験記述の方策について、多くの質的研究方法を吟味し、その実践を行った。その中で、スポーツ運動学における「借問分析」の有効性と重要性が改めて確認された。

しかしながら、この方法を実行する中で、実行のための条件や前提における困難さが浮き彫りになり、実施における課題も確認された。この方法の方法論的分析に関して、本学紀要に、今年度のもう一つの課題であった、「質的な研究方法に関する議論をまとめ、身体学における方法論の方向性を定めること」についての研究を論文として発表した。特に、研究のエビデンスの議論を中心に、身体学が自然科学的な量的研究と対をなす質的研究を用いる学問として、その研究方法の方針を提示できたと言える。

また、身体学の原理論についても、身体と運動に対して未来予持の観点からの分析の方向性を提示するという内容の発表を学会で行った。これによって研究のさらなる進捗を得た。

以上の研究成果をもとに、平成29年度で終了する科研費課題の総括が行われ、次の科研費獲得に向けた、新たな研究課題を構築し、申請も行った。この新たな課題は、今回の紀要と同様、身体学研究の方法論の構築である。身体学の理論的な側面がこの2年間の間にある程度形を見たことから、次に実践的な方面で研究の展開可能性を研究するというものとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

武藤伸司「身体学研究の展開 研究における方法論の構築とその実践」, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要、査読有、第 53 号、2018、63-72

https://twcpe.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=224&item_no=1&page_id=27&block_id=52

武藤伸司「幼児身体学の概要と課題」, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要、査読有、第 52 号、2017、45-53

https://twcpe.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=61&item_no=1&page_id=27&block_id=52

武藤伸司「現象学と自然科学の相補関係に関する一考察(3)」, 「エコ・フィロソフィ」研究、査読無、第 11 号、2017、113-124

https://toyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=9183&item_no=1&page_id=13&block_id=17

〔学会発表〕(計 2 件)

武藤伸司「身体と運動に対する現象学的な考察 未来予持の観点から」, 日本体育・スポーツ哲学会、審査有、第 39 回研究大会、2017

武藤伸司「発生的現象学の現在」, 運動伝承研究会、招待講演、第 15 回、2016

〔図書〕(計 1 件)

武藤伸司「第 2 章 本質直観と時間意識」『現象学のパースペクティヴ』河本英夫・稲垣諭編著、晃洋書房、2017、18-32

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

武藤 伸司 (MUTO, Shinji)

東京女子体育大学大学・体育学部・講師

研究者番号：90732777